

# インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.119

2009年12月25日

発行所 兵庫教育文化研究所

〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

## すべての子どもに十分に平等な教育の機会を

—— フィンランドの学校教育に学ぶ ——

フィンランド教職員組合（OAJ）教育交流団講演会・兵教組教育課程学習会には、兵教組各支部のほか関係者・関係諸団体を含め約160名が参加しました。（兵教組ホームページに概要を掲載）

第1部は「フィンランドの学校教育に学ぶ」と題して、交流団（3名）による講演をおこないました。マルヤッタ・メルトさん（OAJ 特別顧問）からは「フィンランドの教育制度と目的」について、アンネ・コレヒマイネンさん（OAJ 副委員長）からは「特別な支援を必要とする子どもたちの教育」について、そしてリッツヴァ・アールス・サーリさん（OAJ 執行役員）からは「フィンランドの教育体制と教職員教育」についてそれぞれお話がありました。

第2部は「2009年度兵教組教育課程学習会」として、第59次兵庫県教育研究集会（ひょうご教育フェスティバル）の成果・課題や「第32次学校の教育課程実態調査」の結果から、教育研究活動の推進や教育課程の創造的な編成について研究所より問題提起し、意見交流をおこないました。

フィンランドの教育政策の根本にあるのは「全国民に対し十分に平等な教育の機会の提供を保障する」という理念です。教育条件整備のための十分な投資、競争や比較によらない「個々の学び」の保障——PISA調査における好成績は、そういった子どもを中心にすえた教育改革のとりくみがもたらした結果であるということが、はっきりと見えてきました。

### 参加者の感想

- ・ 印象に残った言葉は「比較しない」ということです。他との比較は必要ない、ということ、これからは常に心に留めておかないといけないと思います。私たちはつい比較してしまいがちですが、それによって生徒たちの芽をつんでしまったり、傷つけてしまったりすることもあると思います。今までの自分の教育活動をふり返って、どうすることが生徒たちにとってよいことなのか、いつも変化に対応しながら開発し続けたいと思います。
- ・ 興味深いお話ばかりでした。教員養成・研修などの仕組みについて調べてみたいと一層感じています。ただ、人口500万の小国だからこそこのような教育改革が可能であったとも考えられます。

- 教育において大切なことは何か、その一つ一つを示唆していただいたように思います。自分ではこれでよいだろうと思ってやっていたことでも、そうではないと気づかされることがよくありますが、今回のこの機会もその一つであったように思います。職場に戻って仲間と語り合うとき、きょうのことは必ず話題にするとします。そして、講演の中にあつたように学習環境を支えるスキルを身につけていきたい、仲間とともに指導力（支援力）を高めていきたいとします。
- フィンランドでは平等ということを大切に教育がおこなわれ、平等を保つための支援がなされていることがよくわかりました。少人数を大切に…日本でもそうありたいものです。ほんとうに力をつける手だては競争させることではない、ということが強く印象に残りました。
- 子どもたち一人ひとりを大切にしようとするフィンランドの教育に触れることができ、大変よい勉強の機会になりました。特別な支援、子どもたちがしんどくならないための予防的な支援のしくみなど、もっともっと知りたいことはたくさんありました。また、このような機会があればと思いました。
- 特に心に残ったことは、特別な支援を要する子どもへの教育に力を入れておられるということです。人的配置だけでなく、教師一人ひとりの支援のあり方について、研修・研究されている点は、本当に大切なことです。教師としてのスキルアップを目指してとりくまれている教職員組合としての活動にも注目すべきだと思います。
- 授業に集中できる職場環境はうらやましいです。日本では様々な仕事に追われ、授業づくりに集中しきれていないのが現状だと思います。フィンランドの教育は、まさにゆとりあるものになっているように感じました。
- 興味を持って聞かせていただきました。後の質疑応答でフィンランドと日本の教育の違いがあきらかになって非常におもしろかったです。特にテストの問題。日本では大学までが競争の連続なので、テストを好まないというフィンランドの方々のように考えることは到底できないだろうと思いました。
- 後半の具体的な質問や意見をとおして、フィンランドの学校教育の中身がおぼろげながらわかったような気がします。競争やランクづけのない中、子どもたちに対して明るい未来を提示しているフィンランドの社会が、そのような教育を可能にしているのかと思いました。
- いちばん印象に残ったのは、「学力世界一」になったことを現場の教員が受け入れるのに半年かかったというところです。つまり、「学力世界一」を目指した教育ではなく、目の前の子どもたちにていねいに関わってきたことが、PISA調査の結果につながったのですね。カンフル剤のように「競争」で学力をつけさせようとする考えがいかにも子どもたちの立場から離れているかがわかりました。
- 教師の専門性とその職業意識の高さに驚くとともに、ただ教科を教えるのではなくもっとさまざまなことを学ばせていることについて、あらためて自分もそうありたいと思いました。子どもた

ちの学びを支援する授業づくりをすべての学校でおこなうことができれば、と願っています。

- テスト・競争がないフィンランドの教育、目標達成度が重要であるという考え方、素晴らしいと思います。学力テスト・学校選択等、過度に競争を煽る日本の実態をあらためて問い直したいと思いました。一人ひとりの子どもの個性が大切にされ、その子どもたちの生活背景にまで視点を据えた教育が保障されるよう、わたしたちもがんばっていきたいと思います。
- 「すべての生徒に平等に教育の機会を与える」という目的のもとでおこなわれているフィンランドの教育の一部を知ることができ、とても貴重な経験をさせていただきました。テストなし、通信簿なしといった驚くようなことがたくさんありました。自分たちには当たり前のようなことでも、実は（必要であると）思い込んでいるだけなのだとあらためて感じました。
- 「テストは教育の平等性を保障するためにある」という言葉は印象的でした。普段子どもたちに話してきたことにちょっと自信を持ちつつ、明日からがんばります。交流団の方々がたくさん質問に対していねいに答えてくださり、とてもうれしかったです。ありがとうございました。

#### ◆フィンランド教職員組合（OAJ）教育交流団のみなさん



アンネ・コレヒマイネンさん  
（OAJ副委員長）



リッツヴァ・アーラス・サーリさん  
（OAJ執行役員）



マルヤッタ・メルトさん  
（OAJ特別顧問）